

友愛日本語学校開校、北海道中国帰国孤児定着促進センター所長などの役を引き受け、活動している。

あこがれの満鉄に入り十三年、そして敗

戦

福島県 渡辺 忠

昭和七年五月、故郷を離れて渡満の途につき、五月十三日、安春線の宮原に到着し、駅をおりて、満州での第一歩を記した。当時宮原駅の助役をしていた叔父を頼って渡満した私の夢は、叔父同様満鉄に入ることだった。昭和九年九月、入社試験にパスして、奉天列車区に配属となり、九月十六日初出勤した。満鉄社員としての苦勞の始まりである。

昭和十三年五月、車掌拝命。満鉄現場の花形といわれた車掌になって、天にものぼる心地だった。運転車掌、客扱車掌として連日列車乗務に専念した。

昭和十四年三月、安奉駅の橋頭列車区に転勤となり、

橋頭に移住。安奉線の奉天、安東間が乗務区間だった。当時安奉線周辺は、匪賊が出没して治安状態が悪く、そのため、関東軍の独立守備隊が駐屯していた。同年八月、守備隊の装甲列車に一月間乗務を命ぜられ、兵隊さんと起居を共にしたこともあった。

昭和十五年九月、広沢登茂子と結婚。本溪湖市宮原区の満鉄住宅に入居した。ここで三人の子どもが生まれた。初めての土地で、妻には苦勞のかけどおしだった。

昭和十六年十二月、列車乗務から内勤車掌となり、交番係として勤務することになった。戦時ダイヤで、そのうえ、二か月ごとにダイヤは変更され、一日一日が苦勞の連続だった。昭和十七年に橋頭列車区はなくなり、宮原列車区となって独立し、いっさいを宮原に移転した。

昭和二十年七月一日付で、南新京駅助役を拝命、家族を宮原に残して単身赴任した。駅の勤めは初めてだったので、勉強させられた。昭和二十年八月六日、広島に原子爆弾が投下され、一瞬にして焼け野原となり、数十万人の貴い人命が犠牲になったとのニュースを聞き、戦争の末期を思い知らされた。

八月九日、新京から疎開列車が運転されることになり、駅員全員朝七時から部署につき、疎開者の誘導乗車に一日中汗だくで動きまわり、食事をとる暇もないそがしきだった。初めは客車だけ、つぎは有蓋貨車、そして無蓋貨車となって無蓋車の方は気の毒だった。

夜の八時過ぎまで全員よく働いてくれた。体はくたくただった。こんなこともあった。終戦後三日目にソ連軍が進駐してくるといので、駅長と助役に貸与されていた二丁の拳銃を、油を注いで石油の空缶に収納、駅舎の南の大きな二本の榆の木の間を掘って拳銃を入れた空缶を埋めた。

昭和二十年十月、新京支社で辞令を受け、三か月半ぶりに家族のもとに帰ってきた。

昭和二十二年八月二十三日の引揚までの苦労はなみみていてはなかった。

コロ島からの引揚げ船では、庶務要員を仰せつかり、引揚げまでの治安状況などについて書かされた。

見捨てられた在留邦人

埼玉県 吉田 アサ子

昭和十八年十月、共立女子専門学校を卒業した。

昭和十九年三月、父の世話で、奉天市秋町の官舎に、弟、姉と子（四歳）と、私の四人で渡満した。そして四月より私は奉天市立第二女子中学校教諭として、不自由なき平穩な生活に入った。

昭和二十年八月、ソ連軍の参戦から奉天市の中国人市民のせん動の心配が感じられ、日本人に対する態度も変わったので、一時的な避難のため、準備をしていた、八月十五日、終戦の詔勅が放送され、たいへんなことになったんだと不安と心配がふくらみ、父の帰宅の遅れに心配がつのり、ただ、おろおろするばかりであった。父は夜遅く、大きな荷物を持って帰宅し、食事も忘れ、状況の不利を説明し、今後の処置について、女、子ども二人は、男装に近い服装に変え、髪は短くすること、帰国